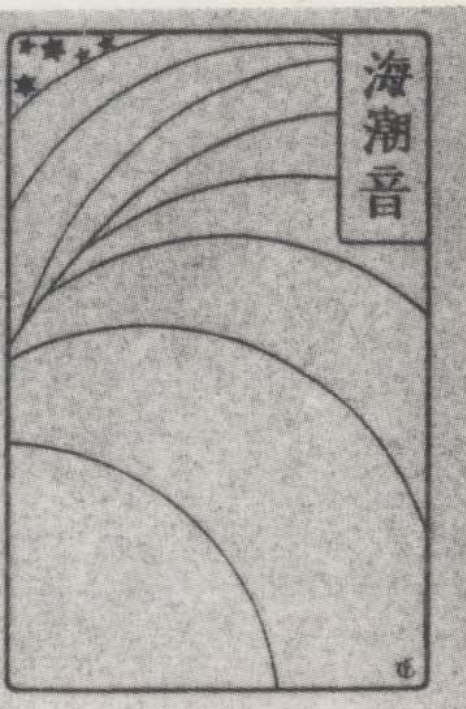


上田敏全訳詩集

山内義雄・矢野峰人編



ボードレール、
ヴェルレーヌ、
ブラウニング、
ロセッティ、マ
ラルメ、ランボ
ー等ヨーロッパ
の高踏派・象徴
派の詩を美しい
日本語に移しか

えた上田敏(1874 - 1916)の訳詩は、薄田
立堇・蒲原有明をはじめ北原白秋・三木露
風ら日本の近代詩に比類なき影響を与え
た。本書は、訳詩集『海潮音』『牧羊神』
をはじめ訳詩すべてを収めた定本である。



緑 34-1
岩波文庫

上田敏全訳詩集

1962年12月16日 第1刷発行 ©

1988年11月16日 第25刷発行

定価 550 円

編 者	やまの 山 や 矢	うち 内 の 野	よし 義 ほう 峰	お 雄 じん 人
-----	--------------------	-------------------	--------------------	-------------------

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-310341-6

岩 波 文 庫

31-034-1

上 田 敏 全 訳 詩 集

山 内 義 雄 編
矢 野 峰 人

岩 波 書 店

目次

海潮音

II

海潮音拾遺

131

牧羊神

173

牧羊神拾遺

293

解說・解題
略年譜・後記

347

海潮音

序

13

ガブリエレ・ダンヌンチオ

燕の歌

17

聲曲

20

ルコント・ドゥ・リイル

眞晝

21

大饑餓

23

象

26

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

珊瑚礁

33

床

34

出征

35

シュリ・ブリュドン

夢

37

シャルル・ボドレエル

信天翁

39

薄暮の曲

40

破鐘

42

人と海

43

梟

44

ポオル・ズルレエヌ

譬喩

47

よくみるゆめ

48

落葉

49

ギクトル・ユウゴオ

良心

52

フランソア・コペエ
禮 拜

57

テオドル・ストルム
水 無 月

71

キルヘルム・アレント
わすれなぐさ

66

ハインリッヒ・ハイネ
花のをとめ

72

カアル・ブッセ

山のあなた

67

ロバート・ブラウニング

瞻 望

73

出 現

75

パウル・バルシュ

岩 陰 に

76

春

68

春 の 朝

77

至 上 善

77

オイゲン・クロアサン

秋

69

キリアム・シェイクスピア

花 くらべ

80

ヘリベルタ・フォン・ポシングル
わ か れ

70

クリステイナ・ロセッティ

花の教

82

ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ

小曲

84

戀の玉座

85

春の貢

86

ダンテ・アリギエリ

心も空に

88

エミール・エルハアレン

鷺の歌

90

法の夕

91

水かひば

93

畏怖

94

火宅

96

時鐘

97

ジョルジュ・ロオデンバッハ

黄昏

99

アンリ・ドゥ・レニエ

銘文

101

愛の教

105

花冠

107

フランシス・ギエレ・グリフィン

延びあくびせよ

113

アルベエル・サマン

伴奏

116

ジャン・モレアス

賦

118

ステファヌ・マラルメ

嗟 嘆 124

テオドル・オオバネル

白 楊 126

故 國 126

海のあなたの 127

アルトゥロ・グラアフ

解 悟 128

ガブリエレ・ダンヌンチオ

篠 懸 129

海 光 130

海潮音拾遺

印度古詩

きみがまなこは青蓮に 133

をとめなれども足曳の 133

足は向けども心はむかぬ 134

ゆく水のはやく 134

も君を想はする 134

蔓草の嬋びし姿 135

サッフオ

タづつの清光を歌ひて 136

君のねがひ 136

忘れたるにあらねども 137

ダンテ・アリギエリ

びるぜん祈禱 138

あはれ今	140
泣けよ戀人	142
忌々しき「死」の大君は	143
きその日は	145
歌よ、ねがふは	146
ありとあらゆるわが思	149
よそ人のあざむが如く	150
アルフレッド・ドゥ・ミュッセ	
春　　夜	152
ペドロ・アントニオ・デ・アラルコン	
「黒瞳」より	154
トゥルゲニエフ	
散　文　詩	156
ブラアテン	172

牧　羊　神

トリスタン・コルビエール	
蟾　　蜍	175
ジュル・ラフォルグ	
お月様のなげきぶし	177
月　　光	180
ビエロオの詞	182
月の出前の對話	183
冬　が　來　る	186
日　　曜　　日	192
日　　曜　　日	194
モリス・マアテルリンク	
溫　　室	198
祈　　禱	200

愁のむろ	201	このをとめ	242
こころ	202	別離	243
病院	205	小歌	244
燧玉	208	夏の夜	245
めつき	210		
エミール・ゾルハアレン		ギイ・シャルル・クロオ	
都會	213	窓にもたれて	246
思想	220	譚語	248
世界	223	世間のある人人には	249
俊傑	229	レミ・ドゥ・グルモン	
フェルナン・グレエグ		髪	252
われは生きたり	234	雪	254
		柊冬青	255
		薔薇連禱	257
ポオル・フォオル		むかしの花	269
兩替橋	239	立木の物語	281

牧羊神拾遺

ルイ・ベルトラン		
ハルレム	293	
石工	294	
鬱金草賣	296	
五本の指	298	
胡弓	299	
鍊金道士	301	
サバトの門立	303	
ステファンヌ・マラルメ		
エロディヤッド	305	
白鳥	310	
薄紗の帳	311	
ソネット	313	
アルテュル・ランボオ		
醉ひどれ船(未定稿)	315	
虱とるひと	322	
ポオル・クロオデル		
頌歌	325	
カンタタ	332	
椰子の樹	337	
エミール・エルハアレ		
不可能	340	
アダ・ネグリ		
母	343	

海
潮
音

遙に此書を滿州なる森鷗外氏に獻ず

大寺の香の煙はほそくとも、空にのぼりて
あまぐもとなる、あまぐもとなる

獅子舞歌

海潮音序

卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徵派とに屬する者其大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徵派の幽婉體を翻するに多少の變格を敢てしたるは、其各の原調に適合せしめむが爲なり。

詩に象徵を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす、今茲に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、ヱルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徵を唱へ、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇に對て、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪とを以て象徵派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新聲、今人胸奥の絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、荆棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らず

むば情なり。

譯者嘗て十年の昔、白耳義文學を紹介し、稍後れて、佛蘭西詩壇の新聲、特にエルレエヌ、ゾルハアレン、ロオデンバッハ、マラルメの事を説きし時、如上文人の作なほ未だ西歐の評壇に於ても今日の聲譽を博する事能はざりしが、爾來世運の轉移と共に清新の詩文を解する者、漸く數を増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に覇を稱するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に嫻はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徵詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徵派の詩人を目して徒らに神經の銳きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の徵候を呈したらずや。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ。

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。佛蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於て、此偏想家と頗る説を異にしたれば、其云ふ所に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪詛の聲として、其一端をかの「藝術論」に露はしたるに至りては、全く贊同の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は譯者の欽仰措かざる者なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を異にす。

抑も伯が藝術論はかの世界觀の一片に過ぎず。近代新聲の評騭に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家等が僅に「藝術論」の一部を抽讀して、象徵派の貶斥に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫も清新體の詩人に打撃を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしなから、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て贊意を表さむと試むるも難い哉。

象徵の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の概念を傳へむと勉むるに非ず。されば靜に象徵詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ばざる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心狀を喚起するに在りとす。例へば本書九〇頁「鷺の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽の徒と共に虚偽の生を營みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に壓きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに懂がる、哲人の愁思もほのめかさる。而して此詩の喚起する心狀に至りては皆相似たり。一〇七頁「花冠」は詩人が黄昏の途上に佇みて、